

子どものいる風景(4)

今、子どもたちのあそび場は

—ドイツ・ハンブルク市があたらしいあそび場(2)—

小林 美実

前回にひきつづき、ドイツ・ハンブルク市のあたらしいあそび場について書いてみたい。広い変化に富んだ水のあそび場につづくように、結構大きな木製の家が数棟ある。どれも不思議な家で、壁にあたるところが全部太い繩を編んだ網でできていたり、高床式の家だつたり、柱や板の間をくぐつてあちらこちらから出入できる家だつたり、どれも大変ユニークである。家々の間は、

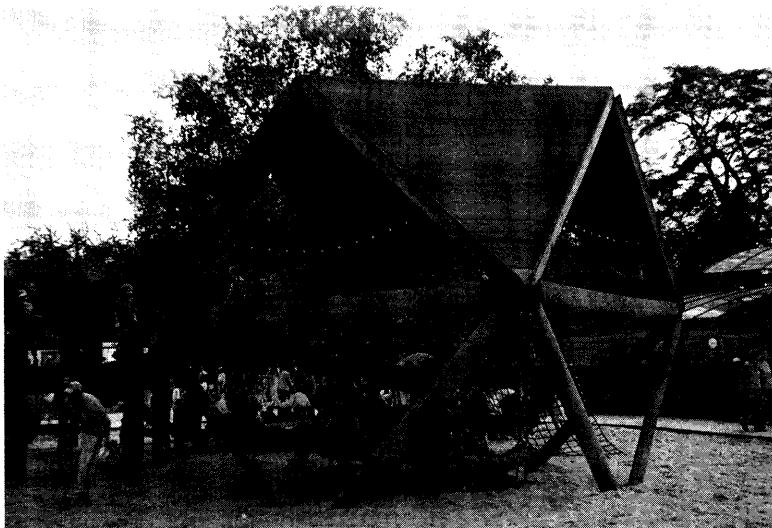
しつかりした橋やつり橋のようにゆれる橋などでつながっている。板で囲われた薄暗い家の中では、小学校高学年か中学生位の男の子が数人腰をおろして、なにやら真面目な顔つきで話をしていた。このくらいの年になると、隠れ家風の場所が気に入るのだろう。小さい子どもたちは、もっぱらゆれる橋を渡つたり、網の壁や狭い板の間をくぐつたりぶらさがつたりして歓声をあげてい



る。おいかけっこをしているグループもある。

もう一つ、この場所では大きな二つの黄色い山が目立っている。それぞれ茶色の濃淡の低い山脈を従えている立派な山だ。高いところからは長短いくつもの滑り台があるが、特に一番高い山から水といっしょに滑り降りるのが一番人気らしい。豪快に滑り降りたり、水に逆らってのぼったりしている。勿論何も無い急な斜面を一気に滑り降りる子どももいる。山脈の部分には池もあり、素っ裸やパンツだけの子どもたちが水しぶきをあげている。

ここでも水が子どもたちの遊びを面白くしている。山のそばまで行つてみたが、けつこうな高さで、とても登る気にはならない。子どもたちは苦も無くさつさと登つてしまふが、時々挑戦する大人は両手をついてへつぱり腰だつたり、途中であきらめて降りてしまつたりして、周りの大人たちにひやかされたり。それもまた楽しいそうだ。岩壁には適当などころに手や足をかけられる四みもある。危険に対してもそれなりの配慮はしてあるようだが、それにしても見ていてハラハラ



▲網と縄で囲まれた家

する。しかし子どもの身のこなしや動きの早くて巧いこと。

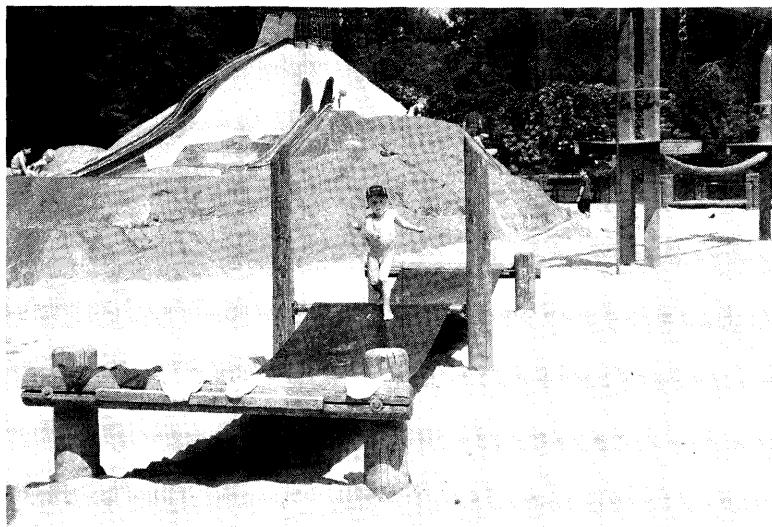
そして登りやすいところや登る方法をすぐ見つけてしまつては、また新しいルートをさがしている。四、五歳ぐらいの結構小さい子どももいる。素っ裸になつて水しぶきをあげているのは、たいていこういう小さい子どもたちである。本当に嬉しそうに遊んでいる。山のそばのベンチでは、その親たちだろう、面白そうにわが子の冒険的なあそびを見守つている。心配そうな表情や、あそびに口出しするようすはない。

また、子どもから目を離して、大人同士で話しこともない。ことばを交わしていても、目は子どもを見ていることに感心した。子どもが熱中してあそぶようすを見るのが楽しい、好きだ、自分たちも楽しく幸せになる、という一昔前までの街中の大人たちのようだ、と思つた。

山の隣の平地にも、ユニークで、なかなかエキサイティングな遊具が作られている。まず幅一・五メートル位の長い鉄板がある。子どもがその上を走ると、ビヨヨーン、ビヨヨーンとうなりながらゆれて地震のように波うつ。カメラを向け



▲黄色の山。手前の山脈部分に池がある。



▲鉄板の上を走ってみせてくれた男の子

ていると、五歳くらいの裸ん坊の男の子が勢いよく鉄板の上を走ってくれた。走り終えると私のほうを見て、得意そうに、にこっと笑った。鉄板をささえる木の棒に、水あそびで濡れてしまつた小さいパンツがいくつも干してあるのが愉快だ。この子のパンツはどれだろう。聞こうとしたが、すばやく山へ走つて行つてしまつた。子どもたちは時々走つてきてはこの鉄板の上を走りぬけ、またどこかへ走つて行く。この遊具だけであそぶことはなかつた。すごい運動量だな、とつくづく思つた。これもまた私たち大人には勇気のいる遊具だ。体の硬い大人には危険で、とても挑戦する気にはならないだろう。しかし渡れた時はどんなに気分がいいだろう。

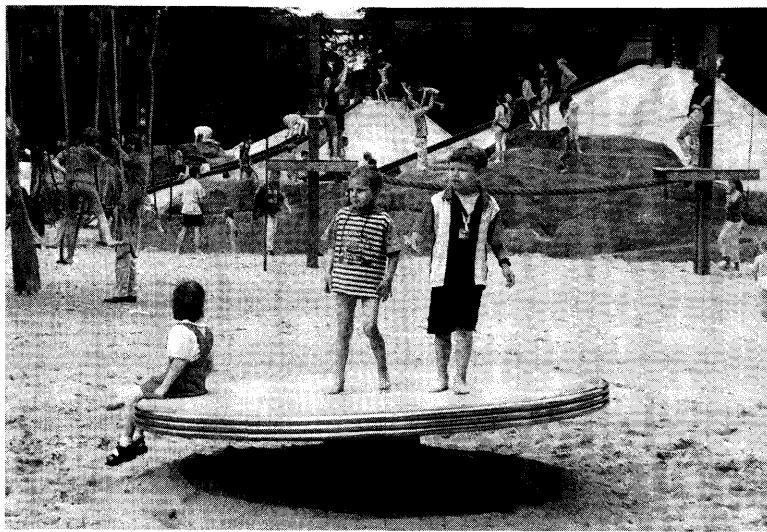
高い広い四角の天井から輪になつた太い繩が、丁度地面から五センチメートルくらいの高さまで、いっぱいぶらさがつてゐる遊具がある。子どもたちは、ぶらさがつたり、よじのぼつたり、ゆらしたり、綱をわたつたり、いくつもの綱をまとめて掴んだり、綱の間でサークスのようにでんぐりがえりをしたりしている。いろんなことが出来るのだな、と感

心していると、綱渡りしながらの「つかまえっこ」が始まった。足を地面につけても鬼になる。いろんなあそびが生まれるものである。

大きな木製の円盤の遊具は、中心だけで支えられ、ぐらぐらとよく動く。小さい兄弟がのって、体で上手にバランスをとりながらあそんでいた。移動するとゆれ方が変わる。どちらが長く乗つていられるか、競争しているらしい。弟の方がすばやくて上手そうだ。途中で女の子が来てはしつこに座ってしまった。ちょっととの間だが、兄弟がじつとやらさないでいたのがほほえましかった。ドイツでは、男の子は女の子に対する親切にし、何かにつけ庇つたり守つたりすることが当然とされてきた。初めてドイツにホームステイした時、それが騎士道の精神である、とかがされて、なんて古臭いことを驚いたが、今でもまだその傾向は少し残っているのだろうか。私の友人の娘たちは親切に守られているうちに、大変強く育ちすぎたようだが。この他にも、太い一本の綱の上を、上からさがっている取つ手につかりながら歩いて渡る綱渡



▲輪になった縄の下がっている遊具



▲円盤。突然に女の子に座られて、困ったような表情の兄弟。後ろに2つの山と綱わたり風の遊具が見える。

り風の遊具や大きなシーソーなどもある。

このエキサイティングな遊び場の奥に、大きな木々に囲まれた静かな広場がある。零から二歳くらいの子どもたちの遊び場で、滑り台、梯子、階段、部屋やコーナー、渡り廊下や橋、みはらし台やバランスなどがある大きなカラフルな木製の遊具の他に、中小さまざまの大きさの木の家、ベンチ、砂あそび場などがある。このあたりの土は川砂のようにさらさらとしているので、土の上に座つてあそぶことも出来る。芝生の部分もある。そこに乳母車に子どもを乗せて親たちがやってくる。回りの鬱蒼とした木々のおかげか、隣のあそび場の子どもたちの声や騒ぎも気にならない。子どもをあそばせながら、大人たちも静かに話をしたりしてゆつたりと過ごしている。

この遊び場は、勿論ブランコ、滑り台、砂場などがあるごく普通の公園とは全く違うが、以前紹介したプレイパークとも違う。プレイパークのように、子どもが自分たちであそび道具や場をつくつたりはできないし、火を使つたり動物を

飼つたりはできない。大人によつて設計され造られた場所であり遊具である。その点では、ニューヨークのマンハッタン子ども博物館とおなじだが、こちらは野外で、しかも遊具がどれも非常に大胆に刺激的に造られている。ここで起きる子どもたちの行動、「あそび」を、作り手の人々はどのように予想して造つたのだろうか。ドイツの森を思いきりかけまわつてあそんだ子どもの時代を忘れていない人、子どもの気持ちになれる人、そして、今の子どもたちの置かれた状況をしつかりつかみ、子ども時代の幸せと健康な育ちを考えられる人々によつて造られたあそび場といえよう。

今この地でも、子どもたちは決して安全な環境で育つていいとは言えない。親たちは子どもに対する犯罪の増加に悩んでいる。幼児については、特に神経を使つていて。歩道を歩く時、しつかり手をつなぐ。車の中に子どもを置いてはなれることは、犯罪とみなされる。だからあそんでいる時でも子どもの姿から目をはなさない。といつて「あぶないから、やめなさい」「いけません」などの干渉はしない。子どものあ



▲0、1、2歳児のあそび場



▲いろいろな遊具であそぶ子どもたち

そびの力を信用しているように思えた。あそび場はいつも賑わっているわけではない。九十パーセント以上の幼児が、一日中保育所・幼稚園へ、そして小学生は放課後保育所の学童保育で過ごしている。だからこのあそび場がいっぱいになるのは、休日である。親たちも家が公園に近いわけではないから、見知らぬ者同士であろう。しかし話題は目の前で豪快にあそぶわが子たちである。しかも、われわれ日本人より社交的なひとつひとびと。すぐコミュニケーションがうまれる。

日本の児童公園やあそび場を考えてみて欲しい。せっかく造るのなら、子どもたちのために造つて欲しい。しかもただ楽しいのではなく、子どもたちがいっぱい体と頭を使い、見知らぬ同士でも体をぶつけあい、あそび仲間になれるでしまう公園を。

(宝仙学園短期大学名誉教授)